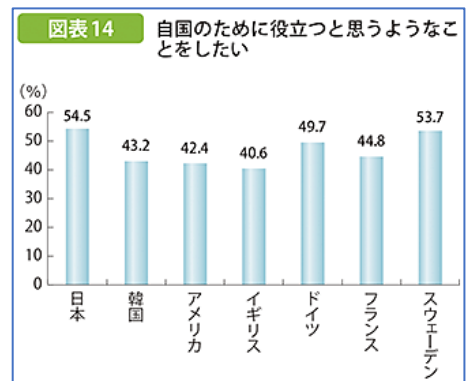




「自己有用感」を育む！

私が度々「わくわく通信」に書いてきた「自己有用感」についてですが、これは日本の子供たちを育てる意味ではとても有効です。日本人の場合、国際的な統計調査からもある特徴が見えてきます。平成30年度版の内閣府の調査によると、日本人は諸外国と比べて自己肯定感が低いことが明らかとなっています。特に10代後半から20代前半の世代において、諸外国との差が大きい結果となりました。しかし、右図を見て見ると、日本人は「自国のために役立つと思うようなことをしたい。」という自己有用感に繋がるような質問では、世界でも高い値を示しています。



「自己肯定感」と「自己有用感」、しばしば似たような場面で使われますが、実は違うものです。自己肯定感は自己評価で、自己有用感是他者評価です。

日本と米国の発達期待を調べた調査研究によれば、米国の幼稚園・保育園の先生や園児の保護者は、「自信を持てる」子になることが最も大切だとしています。それに対して、日本では、「共感・同情・他人への心配り」ができる子になることが最も大切だとなりました。思い返すと、米国の小学校を訪問した時、やたら自分に自信を持ち、他人に負けぬように自己主張している子供たちがいました。それが良い子の条件なのだから、みんな必死になってそうした方向に自己形成していくのです。

そもそも文化的背景が違いますので「褒めて育てる」という発想よりも、「認められて育つ」という発想の方が、日本の子供の自信が持続しやすいのです。なぜなら、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価だからです。「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等とは異なります。

例えば、運動会の「代表リレー選手」に選ばれたとします。自己肯定感だけ高い子供は単に「クラスで一番足が速い」という自信をもつでしょう。しかし自己有用感が高い子供は、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい。」という考えをもつのです。

学校では、様々な人間関係が生まれてきます。そうした関わりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題となります。そういう意味でも「心のパズル」という共通の評価ツールで、大人が子供を、あるいは子供同士が認め合いながら、自己有用感を獲得していくという視点は、子供たちの成長においてとても重要なのです。

